

# 草原の風景 変遷探る

## 神戸・芦屋市境 東お多福山の頂上付近

市民や専門家らでつくる研究グループが、六甲山系の神戸・芦屋市境に広がる草原の歴史を写真でたどろうと取り組んでいる。昔の写真を公募で収集。ネザサがススキを駆逐した変遷など、生物多様性が失われつつある現状が確認できる。メンバーで県立人と自然の博物館（三田市）の橋本佳延研究員は「取り戻すべき植生景観とは何なのかを探りたい」と話す。

（神谷千晶）

### 歴史たどる 写真を収集

草原は、東お多福山の頂上（697㍍）付近。かつては六甲山系最大のススキ草原が広がり、地域住民が屋根ぶきなどに利用する茅場だった。戦後は放置され、繁殖の早いネザサが席巻。ススキやスミレなどは減少し、多様性の乏しい植生になったという。

草原を復元しようと2007年、有志による「東お多福山草原保全・再生研究会」が発足した。当初は100平方㍍の区域6カ所で定期的に刈り取りやモニタリングを実施。その後区域を広げ、現在は計約8千平方㍍に及ぶ。

13年6月から東お多福山で過去に撮影した写真を一般公募。これ

「保全・再生研究会」多様性取り戻そう



1984年10月に撮影された東お多福山の草原（©兵庫県立人と自然の博物館）

ススキ減少 ネザサ繁殖



2014年8月に東お多福山の同じ場所で撮影。ネザサが生い茂っている（©兵庫県立人と自然の博物館／橋本佳延研究員提供）

までにスナップ写真や登山ガイド本の掲載写真など計427点が寄せられ、中には1930年代の写真もある。同会は集まった写真と同じ地点を訪れて今の状況を撮影。その変化を記録に残している。

84年10月の写真には、登山道の両脇に大人の背丈を超えるススキが茂る。ところが昨年8月の写真では、ネザサが繁茂し、登山道を覆い隠している。橋本研究員は「日本の草原は太古から人間が踏んだり、刈り取りや野焼きをしたりして保たれてきた」と指摘。その変容に警鐘を鳴らす。

同会は、草原の生物多様性を取り戻すとともに、環境体験学習への活用、文化財となっているかやぶき屋根の材料提供など、循環する仕組み”を目指す。写真展で調査結果を伝えることも検討しており、橋本研究員は「今昔を写真で比較し、数十年の急激な変化を実感してもらえたら」と話す。

同会事務局（同博物館内） ☎079・559・2014